

ヴィスピャンスキ作、津田晃岐訳『婚礼』に触れながら 田村 和子

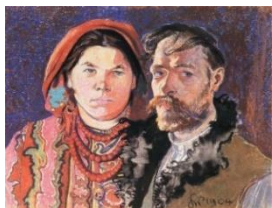
我が家の狭くて短い廊下の壁に、クラクフに初めて滞在した時にフロリアンスカ通りの路上で購入した一枚の絵がかかっています。ヴィスピャンスキ作のパステル画『少年の肖像』=写真= のレプリカです。

頬杖をついてこっちを見ている少年の目に引きつけられ、思わず衝動買いしたのですが、今でもこの絵の前に立つと、良きも悪きも我が心の全てを見透かされているような気がします。



1869年にクラクフで生まれたスタニスワフ・ヴィスピャンスキは文芸運動「若きポーランド」を代表する画家であり、詩人であり、劇作家であり、建築家でした。劇作家として高く評価されている作品は何と言っても『婚礼 Wesele』ではないでしょうか。

『婚礼』のモチーフになったのは、1900年の晩秋にクラクフ郊外の村、ブロンヴィツェ・マウエの農家で実際に行われた詩人の花婿と農民の娘の結婚披露宴で、ヴィスピャンスキ自身も出席しています。劇中には客として訪れた実在の人物—主人、花婿、花嫁、記者、詩人、農民、貴族、ユダヤ女性、等々、そして歴史と文学と伝説から現れた亡霊たちが登場します。亡霊たちは実在の人物たちの内面を映し出す存在です。



(参考) 妻と芸術家の自画像 1904

<http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE86Wyspianski.pdf>

ポーランドではこの作品を知らない人はいません。日常生活においても、そして児童文学の作品中にも引用されています。たとえば、ポズナン出身の児童文学作家、マウゴジャタ・ムシエロヴィチ作の『金曜日うまれの子 Dziecko Piątku』では、学校が休みに入ると自作の人形を駆使して路上で一人芝居をしている15歳の少年コンラドが自ら脚色

した『婚礼』をポズナン郊外の小さな町の広場で披露しています。その際に知り合ったばかりの16歳の少女、アウレリアに次のように言います。

「いくつかのシーンを選んでぼく自身が脚色したんだ。『婚礼』はいつの世でもその時代を反映しているし、ポーランドの戯曲の中では一番予言的な作品だからね」

1979年秋からの一年間、わたしは家族とともにクラクフ北西部の団地で生活しました。その団地はブロンヴィツェ・マウエ地区に接していて、団地からその地区までの道はわたしのお気に入りの散歩コースでした。ブロンヴィツェ・マウエに足を踏み入ると、そこには街中とは違った落ち着いた農村風景が広がっていてほっとしたものです。バラの木を雪と寒さから守るために藁で巻いた、邦訳版では「藁ぼっち」と訳されている *chochoł* (ホホウ)が農家の庭にあったことも覚えています。

しかし当時、わたしはその地区が有名な戯曲の舞台になっている村だとは思いませんでした。藁を巻かれたバラの木が作品の中では亡霊として登場し、最終場面では登場人物たちを夢遊病者のような踊りの輪に誘導しているとは思ってもみませんでした。それから45年の歳月が流れ、『婚礼』はわたしにとって、ポーランドの原風景が広がる作品のひとつになっています。

一昨年、待望の『婚礼』邦訳版(未知谷、2023.12)が刊行されました。訳者はポズナン在住の津田晃岐さん、安藤厚先生のかつての教え子さんです。クラクフ近郊の方言を日本の方言によって表現した津田さん訳の『婚礼』を近い将来、日本の劇場で観ることができる日がくることを楽しみにしています。

(たむら・かずこ、ポーランド児童文学翻訳者)

展覧会 **若きポーランド** ~ 色彩と魂の詩 1890-1918

京都国立近代美術館 2025.3.25 (火) - 6.29 (日)

19世紀後半、ポーランドの歴史や文化的逸話を大きなスケールで描き名声を博し、クラクフ美術学校校長を務めたヤン・マテイコのもとから数多くの若き芸術家たちが巣立ちました。彼らは祖国の独立を願いつつ、そこに自らの個人としての心情を結びつけ、象徴性に富み色彩豊かな独自の芸術を絵画のみならず応用芸術や文学をも含む広い分野で展開し、〈若きポーランド〉と呼ばれました。本展では、ヤン・マテイコを前史とし、〈若きポーランド〉が生み出した芸術を包括的に日本で初めて紹介します。ヴィスピャンスキの作品もご覧になれます。

